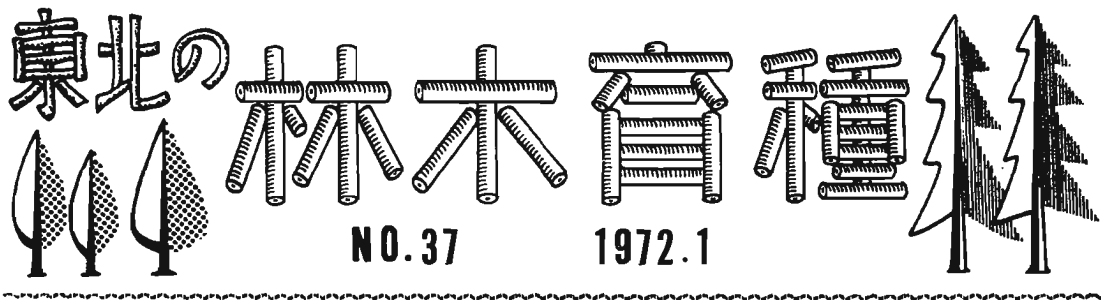




年頭の御挨拶

新年にあたって

梅 本 昌 一

新年おめでとうございます。身も心もひきしまる冷気のなかで正月をむかえられたことと存じます。

さて昨今林業の危機ということがさかんに叫ばれております。木材の需要の増加にもかかわらず材価は低迷し、外材の輸入はますますふえ、造林の方もさっぱり伸びない。その外に色々のことがあってこのように言われるのでしょうか、その中で造林の停滞はまことにこまったことだと思います。とくに人工林の伐採跡地の再造林が年々減ってきているのは、タコが自分の足を食っているようなものです。

どうもわれわれ日本人は目先のことにとらわれて流行につっ走る傾向があるようにおもいます。ただいまのことが大切であることはわかっていますが、もっと先のことも考える必要があります。わが国の林業は過去においていろいろのあやまちをおかして来ました。昭和初期の恒続林思想の皮相的なとり入れは昭和年代の国有林の人工造林の大巾減少をもたらしました（その外の理由もあったのですが）。これが今後の国有林の経営を苦しくしていく一つの原因となっているのです。拡大造林、伐期の短縮、密植などもその本質を理解していればよいのですがあやまったとり入れ方のため色々失敗してきました。林業の流行はちょうどフラフープのような気がしてなりません。

林木の育種も発足当時の一般の人のうけとり方に比較して、その後の熱のさめようはどうでしょう。育種の無用論までとび出す始末です。

これからますます機械文明が進み、人口が増加するにつれて国土保全、環境浄化の必要性から森林の存在そのものがますます重視されるようになって行くことでありましょう。しかし森林の木材生産という役目は依然として主役をつとめることは間違いありません。そのためには生産力の高い健全な森林を造っていくが必要になってきます。当然林木育種もこのための一つの推進力となって行かなければなりません。

育種を担当する人は一時の流行にまどわされることなく、大地にしっかり足をつけて仕事をすすめていただきたいと思います。また林業の第一線を担当する方々には産地、立地条件、樹種などを無視した造林が、今までどのような失敗をくりかえして来たかをよく考えて、二度と同じ失敗をくりかえすことのないようにお願いします。

日本は敗戦の廃虚の中から立ち上って経済的には復興して来ましたが、山の復興はまだまだです。われわれ林業人は後に続く世代のためにもっとも立派な緑の山をつくって行く責任がある筈です。お互に力をあわせて頑張りましょう。

（東北林木育種場長）

捨てるということ

水 田 輝 弥

明けましておめでとうございます。今年も相かわりませず、御好宜のほどをお願い申し上げます。

正月の3カ日間は国中の工場や事務所がほとんど休みで、ふだんはドンヨリとよごれている大都市の空も青く、廃液で黒くなっている川の水も生氣をとりもどしていることでしょう。奥羽支場でも国道13号線を走るトラックやダンプカーがほとんどなく、静かな元旦をむかえました。

昨年は公害の問題が新聞に出ない日は1日もなかったようです。新年早々からきたない話で恐縮ですが、工場は世界各地から原材料を集めて物を生産し、廃棄物を煙突から空へ、下水から川へ海へと捨てます。われわれの家庭でもこれらの製品を買い集め、ゴミやし尿を捨てます。

生産力が高まり、消費水準が向上しているのにくらべて、廃棄物の処理がたちおけている結果ではないかと思います。技術的にも集める技術や加工技術と捨てる技術とがバランスを失しているように思います。

林木育種事業にもやはり集める技術と捨てる技術とがあります。精英樹の選抜育種事業は集める仕事はほぼ終了し、これからは次代検定等を通じて捨てるものと残すものを選別する、つまり捨てる技術の段階になりました。採穂園の体質改善

も捨てる技術が必要です。

抵抗性育種事業は着手したばかりで、今は集める段階にあります。それでも集められた候補木のなかから、さらにすぐれた個体を選抜するために行なう審査業務は、やはり捨てる技術が必要になります。

マージャンも考えようによっては集めて捨てることの繰り返しにすぎません。集める方はツキに左右されるので技術とはいえませんが、捨てる方はやる人の技術といえるでしょう。勝負のわれ目は、結局捨てる技術にあると思います。

人間の身体は実に精巧にできています。酒をあまり体内に集めすぎると、廃棄物をえりわけ肝臓に過度の負担がかかったり、捨てる方専門の出口が痛んだりします。餅を集めすぎると出口のパイプがつまってトタンの苦しみをなめさせられます。これらの活用は捨てることをよく考えて集め方を加減しろという、下半身からの警告と考えられます。

「捨てる」ということは「集める」とことと同様ときにはそれ以上に重要なことです。慎重さと決断力という相反する能力が両立することが要求されるからでしょう。

(奥羽支場長)

“支持根の山、”

昭和45年度民有林選出の雪害抵抗性候補木については、昭和46年度において奥羽支場が現地審査を行ったが、その際、山形県が選出した雪害抵抗性候補木選出林分のなかで、天童市、森谷長一郎氏所有のスギ林は20年生の若い人工林であるが、全山支持根が発達して根元曲りのほとんどない珍しい林分である。

積雪地帯に造林したスギは雪圧によって毎年倒伏を繰返えすが、支持根の発達したものは根元曲りが少なく、立ち上りが早いということで、雪害抵抗性個体選出条件の一つに「支持根がすぐれ根曲りのないもの」としてある。確かに支持根は樹体を支えて根元の谷側に発達した「張り根」であることは間違いないが、果して支持根ができたために樹幹が立ちあがったものか、それとも樹幹が立

ちあがった後に支持根が発生したものか問題のあるところである。

それとは別にスギは品種によって支持根のしやすいものと、でにくいものがあり、そのことが根元曲りに大きな関係があることは田中周氏によって報じられている。ともあれ、支持根は雪害抵抗性個体を選出する場合、候補木の特徴として調査しなければならないので、支持根発生メカニズム解明とともに、支持根は遺伝的なものか環境的なものかも確かめる必要がある。

雪害抵抗性育種事業を担当している奥羽支場では林試東北支場山形分場の御協力を得て、とりあえず、この林分の積雪量調査を始めたが、育種的手段としても、この林分からのみしょう苗やさし木クローンによって次代検定を実施することになっている。

(やまだぎさぶろう)

東北地方におけるスギさし木事業の実際 (3)

太田 昇

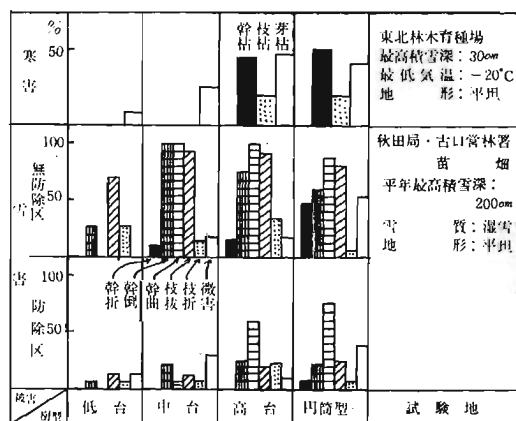
採穂台木はなぜ低台や高台円筒型がよいのか

採穂台木をつくる目的は、発根のよい多量のさし穂を毎年継続しながら、しかも効率よく採取するためにあるので、それには

台木の樹型により<さし穂の発根性や採穂量が寒さや雪に対する被害>がどうかを十分にんしきし、採穂園の環境条件の実態をふまえて樹型をきめる必要があることはいうまでもないが前稿¹⁶⁾で、東北地方ではさし穂の発根性や採穂量よりも寒害と雪害をふせぐことに重点をおいてきめるのがさきであり、ほとんどの採穂園では低台仕立が最も安全で、一部少雪温暖なところでは高台円筒型仕立がよいことをのべた。なぜ、この結論になったかを、これまでの調査例¹⁶⁾¹⁷⁾¹⁸⁾から紹介する。

台木の樹型と寒・雪害 台木の樹型のちがいによる寒害および雪害形態と発生割合を示したのが図—1である。

図—1 樹型と被害



注1) 寒害は昭39年秋から40年春にかけて発生した幹枯れ(主幹長35cm以上の部分がかれた)、枝枯れ5~35cmの幹や枝がかれた)、芽枯れ(芽の先端5cm以下の部分がかれた)の被害で、試験地は寒害防除をしていない。

2) 雪害は昭38年から44年までに発生した幹の折れ・倒れ・曲り、枝抜け(幹割れもふくむ)枝折れ、微害(梢折れ・小枝折れ・寒風害・野兎の害・むれ)の累積被害で、雪害防除区は毎年、

粗朶や竹の支柱とナワをもちい雪囲した。

3) 調査台木数は各樹型ごとに寒害では50本雪害では25本で、数値は調査台木数に対する被害本数の割合を示す。

採穂台木は毎年さし穂をとって新しい不定芽をださせるので、つねに気象害とくに寒さの被害をうけやすい条件にあるといえる。

不定芽とは幹や枝を切断したところや、枝の分岐部などに発生する新しい芽をいう。

樹型と寒害は図でみるように、試験地のように少雪寒冷なところでは低台・中台でも消雪後の晩霜害(主として芽枯れ)はさけられないが、高台や円筒型のように仕立方形式の大きいものは幹枯れや枝枯れなど致命的な被害が発生する。

調査した高台と円筒型の台木は樹高1.8m、幹の根元直径8cmでかなり大きくなったものであったが、それでも雪上に露出していた地上30cm前後より上の幹がかれたのだから、事業的なきぼで高台や円筒型をつくるのは不可能にちかいといえる。低台と中台で芽枯れの被害をうけたさし穂のなかで、被害程度がかかるくさし穂として利用できるものの割合をみると、低台では88%・中台では30%で、低台は中台より被害量も少なく、被害程度もかるいので試験地のようなところでは多少の被害があっても低台仕立にせざるを得ないし、かりに高台や円筒型がつくられても寒害のためひとりでに低くなってしまう。

この試験地は温暖地・少雪温暖地・少雪寒冷地・多雪地の4ブロックに設置した一連のものであるが少雪寒冷地の当該試験地は被害のため中止した。

既設の採穂園は当场以上に寒さがきびしいところはないと思うが、災害は忘れたころにおこるといふ諺があるように、周期的あるいは突発的な異状寒波にみまわれることは十分かんがえられるので、少雪寒冷地ではちゅうちょしないで低台仕立にするのが最も安全な樹型である。

樹型と雪害も寒害の例とおなじように、低台が少なく高台・円筒型と仕立方形式の大きいものはそれだけ積雪の沈降力による受圧面が大きく、幹

折れや幹倒れ・枝抜けなどの激害が発生する。

雪害は同じ被害形態でも樹型によって実害の小さいものと大きいものがあり、幹折れはいずれの樹型でも致命的な被害であるが、幹倒れや幹曲りの被害は低台では樹高がひくいため倒れた幹が地面につくとそれ以上被害がすすまないで、被害形態は認められても実害はほとんどないといえる。一方、高台や円筒型では当面の実害がさほどでなくとも、翌年以降の雪圧で幹折れや幹割れなど致命的な被害の誘因になって被害を累積増大させる。また幹の傾斜したものをそのままにしておくと、地面側に発生した萌芽枝は発育が阻害されるばかりでなく、不定芽の発生をいちじるしく減少させるので、とくに円筒型のように幹にちかいところ、あるいは幹自体に採穂拠点をつくる樹型では、幹の傾斜もかなり実害があるので消雪後ただちに樹体をおこしてやるのが大切である。

萌芽枝とは不定芽ののびたもので、さし穂になる枝。

採穂点拠とは不定芽を発生させ、さし穂となる萌芽枝を採取するところ。

雪害のでかたは積雪量はもちろん地形と雪質により被害程度がちがい、図一1は平坦地の例だが傾斜地ではさらに被害がしやすいことはいうまでもない。

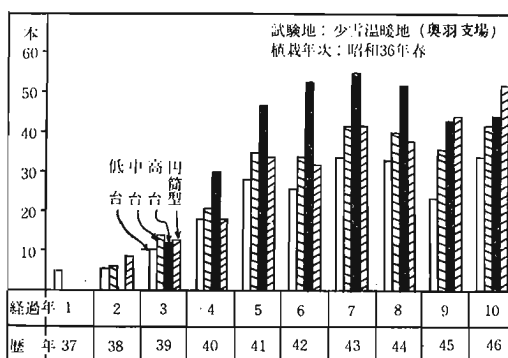
円筒型は樹冠径がせまいため被害(冠雪害)を回避できる樹型といえるが、台木が雪圧にたえられる時期、すなわち、植栽してから7～8年の間は、樹体の倒伏をふせぐ雪害防除が必要である。

図でみるように雪害防除の効果はあきらかであるが、それには資材と労力が必要で、しかも絶対安全だという防除法がない(雪害防除法の具体例は後述の予定)。

台木の樹型と採穂量 秋田スギほか4系統のさし木苗をもちい低台・中台・高台・円筒型に誘導をはじめて10年になる台木の採穂経過を示したのが図一2である。数値は各樹型とも調査台木50本の平均値で、材料が比較的不定芽がでやすく採穂量の多いものであるから、普通の精英樹の採穂量はこれより若干したまわるのが多いといえよう。

植栽してからさし穂がとれはじめるのは低台では植栽翌年から、中台と円筒型は2年目から、高台は3年目からで樹型によりちがうが、これは仕

図一2 樹型と採穂経過(1本当り採穂量)



立方形式にみあう台木の大きさになってから樹型づくりをはじめるためである。

さし穂は樹型づくりがはじまると毎年とれだし、各樹型とも植栽してから7年目ころまでは連年採穂量が増加する。これは樹型づくりをはじめて7年ごろに初期の骨格がほぼできあがるため、人間でいえば、ちょうど義務教育課程をおわったところといえよう。したがって一人前の社会人としての台木を完成させるまでには、後述(予定)するような第二の教育期間、すなわち、樹型づくりや肥培管理などが必要であり、それによって採穂量はさらに増加することになる。

図一2は未完成な台木の採穂経過ではあるが、樹型と採穂量をみると、低台が最も少なく、中台・円筒型・高台の順に樹型の大きさに比例して多くとれている。台木が完成するまではさらに5、6年以上の期間が必要であり、それまでは各樹型とも採穂量はふえつづけていく。

われわれは台木1本当り採穂量の目安を60本としており、材料がわかいため各樹型とも60本以下だが、秋田営林局大曲営林署の採穂園では、植栽して40年になる低立仕の台木1本から100～150本のさし穂がとれるものがたくさんあるので、60本の目標は遠からず生産できると思われる。

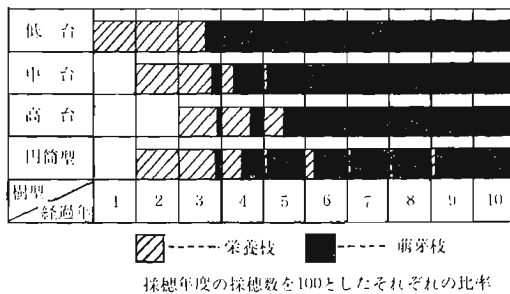
さし穂の形質が栄養枝から萌芽枝にかわる時期

スギの発根性は精英樹(個体)によりちがうのは普通であるが、1本の台木からとったさし穂でも発根するものと、しないものがあり、その原因がなんであるかがわからないのが、さし木事業をすすめるにあたっての最大のなやみであるが、どういうさし穂を、どうすれば発根しやすくなるか

については、原因はわからないながらその現象はかなりはっきりしたものがあつた、それらの事例は稿をあらためてふれることとし、ここではその一例として、さし穂の形質が栄養枝のものと萌芽枝のものでは、萌芽枝が**あきらかに発根しやすい**ので、発根のよいさし穂を生産するには早い時期から萌芽枝がとれるような台木にする必要がある。そこで図—2の資料をもとに台木の樹型によっていつごろから萌枝枝のさし穂になるかを示したのが図—3である。

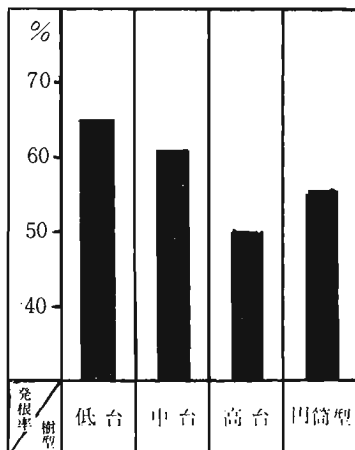
栄養枝とは自然の状態ですた枝。

図—3 さし穂の型質の変化



図でみるように、ほとんどのさし穂が萌枝枝になる時期は低台が最もはやくて4年目から、中台は5年目、高台は6年目で、円筒型は4年目から萌枝枝がとれるがかなりおそくまで栄養枝が残る。これはさし穂がとれはじめる時期が樹型によってちがうことを前にのべたが、萌枝枝は栄養枝を剪定したために発生する不定枝ののびた枝であるから、**樹型づくりのはやい台木は萌芽枝のとれる時期が早くなるのがとうぜん**で、この点でも低台が有利であるといえる。

図—4 樹型と発根



台木の樹型とさし穂の発根性のちがい

同じ精英樹のさし穂でも台木の樹型によって発根がちがうので、図—2の資料をもとに各年次別に採穂した栄養枝と萌芽枝の累積本数に対し、栄養枝と萌芽枝の発根のちがいを乗じて求めたのが図—4であり、図であきらかなように発根は低台が最もよく、ついで中台・円筒型で高台が最もわるい。

これは同じさし穂でも、どうゆ台木の、どの位置からとった穂であるかによっても発根がちがう。台木の根にちかい地際のもの(低台や中台)や幹にちかいもの(円筒型)ほど発根しやすいため、ここでも低台は実用的だといえる。

くりかえしてなぜ低台や円筒型の台木がよいかを要約すると

○雪はなによりも寒さの被害からまもってくれるという天与のみぐみを利用するのが賢明であるが、雪害をふせぐには多少採穂量が少なくとも低台仕立が最も理にかなっている。

また、低台は他の樹型よりも発根のよいさし穂をしかも早くから生産できる。

○円筒型仕立は雪圧で樹体が倒れなくなるまで雪害防除してやるとその後の雪害は比較的少なく、土地の空間を立体的に利用できることとさし穂の発根は低台よりわるいが採穂量が多い。ただし冬期間雪上に露出した部分が寒害をうける心配があるので採穂園の環境によってはのぞましい樹型である。(つづく)

引用文献

- 16) 太田 昇：スギ採穂木の仕立方試験、東北の林木育種。No.7. 1967.7.
- 17) 川村忠士：スギ採穂木の仕立方と寒害、青森局造林技術発表会集録。昭43.
- 18) 佐藤文男：スギ採穂木の仕立方試験(中間報告)、45年度林木育種研究発表会講演集。林木育種協会。昭46.
- 19) 太田 昇：東北地方におけるスギさし木事業の実際(2)、東北の林木育種。No.34. 1971.7.
(東北林木育種場・原種係長)

スギ採穂台木の肥培・地表管理試験

佐 藤 文 男

Ⅰ. はじめに

農業では肥培管理技術のよしあしが直ちに作物の収量や品質に影響するのでくに重要視されている。林業でも苗畑段階での育苗では農業における肥培管理とほとんど違いないが、採種園や採穂園の肥培管理については新しい問題だけに、これに関する報告はきわめて少ないといえる。

当場では、スギ採穂台木の肥培・地表管理法の違いがさし穂の形態や発根性、採穂量などにおよぼす影響を検討し、合理的な採穂台木の肥培・地表管理法を確立するために、昭和37年春に試験地を設定し、毎年剪定整枝や施肥を繰返しなが採穂量や発根性などを調査してきたので、中間的にとりまとめ報告する。

この報告にあたり試験設計と41年までの調査を直接担当された太田技官（現・東北林木育種場原種係長）に対し厚くお礼申し上げる。

Ⅱ. 試験設計と供試材料

試験設計は表一に示す10種類のものに3回繰り返し区を設けたポット試験で、ポットは図一1のように配置した。

コンクリート製井戸枠（直径90cm・深さ90cm・底なし）を埋設したポットに畑土を入れ、1本の台木からとったさし木苗を1ポットに1本ずつ昭和37年度春定植し、供試台木の樹型を当地方に最も適する低台仕立（九刈）にするよう38年から樹

型誘導をはじめてきた。

設定した37年は土壌をコントロールするため、無施肥としたが、翌年から設計にしたがった施肥と採穂量および穂の発根性を調査してきた。

Ⅲ. 調査結果

調査は毎年春、各ポットごとにつぎのものについて行なった。

①採穂本数と生重量 さし穂に適した枝を荒穂として採取した本数とその生重量

②総枝葉生重量 樹型誘導のため剪定整枝した枝葉の生重量と①の荒穂生重量を加えた総枝葉重量

③穂の長さ ①の荒穂45本（1ポット15×3回）の平均穂長

④穂の含水率 ③で調査した荒穂15本（1ポット5本×3回）の絶乾重量（120℃で20時間処理）から求めた含水率

⑤穂の発根性 ④畑土さし ①のさし穂から90本（1ポット30×3回）を穂作りし畑土にさす。

⑥水さし ①のさし穂から15本（1ポット5本×

図一1 ポット配置

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩
⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳
㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚

表一 試験設計

年度 処 理	38 ~ 41				42 ~ 44				45			
	N	P	K	マルチ	N	P	K	マルチ	N	P	K	マルチ
A 無肥料区	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
B 無肥料マルチ区	—	—	—	1,000	—	—	—	1,000	—	—	—	1,000
C 標準区	9.1	4.6	4.6	—	13.7	6.8	6.8	—	20.6	13.7	10.3	—
D N欠区	—	4.6	4.6	—	—	6.8	6.8	—	—	13.7	10.3	—
E P欠区	9.1	—	4.6	—	13.7	—	6.8	—	20.6	—	10.3	—
F K欠区	9.1	4.6	—	—	13.7	6.8	—	—	20.6	13.7	—	—
G 3 N区	27.3	4.6	4.6	—	41.0	6.8	6.8	—	61.8	13.7	10.3	—
H 3 P区	9.1	13.8	4.6	—	13.7	20.5	6.8	—	20.6	41.1	10.3	—
I 3 K区	9.1	4.6	13.8	—	13.7	6.8	20.5	—	20.6	13.7	30.9	—
J 標準マルチ区	9.1	4.6	4.6	1,000	13.7	6.8	6.8	1,000	20.6	13.7	10.3	1,000

（註）1. 施肥量は台木1本当りの成分量（g）。 2. マルチ材料は稻ワラ。

表—2 試 験 成 績

項目	調査年度	処 理		標準	N欠	P欠	K欠	3N	3P	3K	標準 ⊕ マルチ	摘 要
		無肥	無肥 ⊕ マルチ									
採 穂	本 数(本)38~45	54.2	51.5	67.3	45.8	63.2	64.2	64.5	61.6	63.7	54.1	年平均 台木1本当り "
	生 重 量(g)39~45	1,311	1,259	1,634	1,175	1,649	1,573	1,757	1,526	1,573	1,530	
総 枝 葉 生 重 量(g)	41~45	2,683	2,450	3,364	2,343	3,407	3,299	4,018	3,271	3,346	3,391	"
平 均 穂 長(cm)	39~45	30.0	28.5	30.5	28.8	31.1	30.3	31.5	30.2	30.8	30.5	
穂 の 含 水 率(%)	40~45	60.6	60.1	60.3	60.7	59.1	59.4	60.5	58.9	59.3	60.5	
発根率	畑土さし(%)	70.4	73.0	73.7	74.8	75.2	76.3	74.8	82.2	77.4	65.9	
	水 さ し(%)	91.1	86.7	91.1	84.4	98.3	100.0	95.6	88.9	95.6	82.2	

(注) 発根調査は38年より実施しているが最近3カ年の数値を示す。

3回)を穂作りし、ワグネルポット内の水にさしつけた。なお、さし穂はいづれも無処理であり、調査はさしつけ当年の秋に行なった。

以上の結果をまとめたのが表—2である。

台木1本当り採穂本数と生重量および総枝葉生重量は、標準・P欠・K欠・3N区が高く、無肥料・無肥料⊕マルチ・N欠区が低い。さし穂の長さ含水率は処理間に目立った差がない。

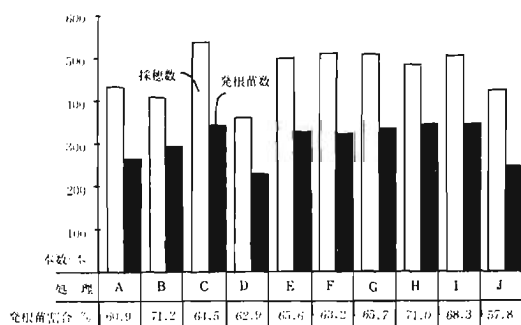
発根率は各処理間で顕著な差がなく、しかも畑土さしと水さしの数値が一致しないものもあるが、3P・3K・P欠・K欠区がよく、無肥料・マルチ区がわるい傾向があり、やはり発根にはリンサン・カリが関与すると思われる。

また、38年から45年までの8カ年の台木1本当り累積採穂量・これからえられた発根苗木数とその割合を示したのが図—2であり、N欠区の採穂量が少ないことがわかる。

Ⅳ. まとめ

畑土を培地にして、採穂台木の肥培・地表管理試験をはじめて8年間の経過をみると、

図—2 台木1本当り採穂数と発根苗数および発根苗の割合(発根調査:畑土さし)



無肥料は枝葉がかたく伸びがわるく、夏でも葉の色は黄緑色を呈し、なかには枯れあがるものもあって穂の生産がわるくなる。

穂の生産にはチッソが最も影響し、リンサン・カリをやってチッソをやらないものは無肥料よりも採穂量がおとる。またチッソをやりすぎたものは枝葉の生産重量は多いが良い穂がとれない。

施肥の違いと穂の発根ははっきりしない。これは発根の良否に関与する肥料要素のはたらきは、穂の生産に関与するはたらきのそれより、かなり微妙なものであらうと思われること、使用した培地が畑土であるため処理反応があらわれにくいこと、さらに、それ以上に供試材料の発根がよすぎること、それに基因するのではないと思われる。それでもリンサン・カリの施与は発根をよくする傾向があり、今後の追跡調査をみなければわからないが、毎年剪除される枝葉量にふくまれる三要素量を目安としながら、リンサン・カリの割合の多い施肥がのぞましいと思われる。

マルチは土壌構造を団粒組織にし作土としてのぞましい形態にかえる、とともに除草労力を節減するが、穂の発根性がわるい傾向がみえてきた。

(奥羽支場:原種係)

質 問 欄

をもうけました。
林木育種についての質問、ご相談を紙上でおこたえます。ご遠慮なくどしどしお寄せ下さい。

◆ 1・2月のさし木作業のポイント ◆

お屠蘇気分のぬけやらぬこのごろですが、おくれればながら台木の雪害防除など、ひとこと、

冠雪たたき 円筒型仕立の台木は雪で幹が倒れたり曲ったりすると、ほかの仕立方以上に採穂量が少なくなるばかりでなく致命的な被害である幹折れの誘因になる。

樹体のかたむいた台木は、普通の造林木とちがい人手をかりなければおきあがれないので、倒さないように注意することが大事である。

採穂園の地形は、ほとんどが平坦か緩斜地であるから樹体のかたむく原因も、雪の沈降や匍行力よりは降雪初期の冠雪と風によって風下方向に倒れるものが多く、とくにドカ雪の場合には、はなはだしい被害が発生するから、スキーをはいて採穂園をみまわりながら、ストックで冠雪をたたきおとすのが原始的ではあるが最もよい方法である。と同時に、雪国にすむ者の健康管理の点からものぞましいことであるからやってもらいたい。

かこいホドホドむすびめガッチリ 低台仕立以外の台木はどうしても雪囲いが必要だが、ヘタな雪囲いはかえって被害を大きくするのでつぎのようにする。樹高が最高積雪深より低いものは、樹幹と平行なかたちで丈夫な杭、しかも杭の頭が雪面よりでるような長さのものを根元にたて、地際から順次上の方に枝をナワでシバリあげ、ナワの端は杭の途中にむすばないで必ず杭の頭にヒッカケてからガッチリむすぶようにする。杭の途中でナワをむすぶと雪圧でナワがズリオチ、台木はちょうどチョウチンをたたんだようにメチャクチャにおりたたまれるので、杭の頭にナワをヒッカケ、ズレないようにする。ナワで枝をシバル程度はキツからず、ユルからずのホドホドにまくのがよい。杭の頭が雪面よりでていると倒伏しにくいとともに、春先の消雪が促進される。

さらに杭が折れたり、倒れたりしないよう、3本の杭で三脚をくんでやる。

樹高が積雪深をこすような台木は、かなり幹が太くなっているはずだから、幹を杭がわりにして枝をシバリあげ、三脚杭をくんでやるようにする。
(おおたのぼる)

○東北の林木育種昭和46年(1971)総目次

No. 31 (1月)

新年の御挨拶	梅本昌一	1
新春をむかえて	水田輝弥	1
林木の育種を語る(座談会)		2

No. 32 (3月)

東北地方におけるスギさし木		
事業の実際(1)	太田 昇	1
「4・5月のさし木作業のポイント」		5
ペイするスギさし木苗木の生産法	佐々木研	5

No. 33 (5月)

林木の抵抗性育種		1
「5・6月のさし木作業のポイント」		8

No. 34 (7月)

東北地方におけるスギさし木		
事業の実際(2)	太田 昇	1
採穂園・採穂園での機械作業		3
「7・8月のさし木作業のポイント」		8
「育種パトロール」		8

No. 35 (9月)

林木における天然集団の変異と		
育種への利用	三上 進	1
秋田営林局管内スギ採種園		
順調に生育	水田輝弥	3
「育種協議会便り」		5
遺伝学の進歩		7
「9・10月のさし木事業のポイント」		8

No. 36 (11月)

アカマツ採種園の樹型誘導	柴田三郎	1
「11・12月のさし木事業のポイント」		5
東北の林木育種の変遷をふりかえる船引洪三		6
耐雪性候補木の審査にあたって	奥羽支場	7

編 集 後 記

あけましておめでとうございます。

毎年1月号の後記を書きながら、今年こそは読者の投稿があるだろうと期待するのですが、結果はカラ振りに終わっています。現場でご苦労されている各位の声が本紙に掲載されてはじめて育種事業のカケ橋としての使命が全うされるはずだと考えていますので、体裁とか文調にこだわらないで現地の生な声をご投稿下さい。

昭和47年1月1日発行

編 集 東 北 林 木 育 種 場
岩 手 県 岩 手 郡 滝 沢 村 滝 沢
T E L 019688(滝沢駅前局)―4517
印刷所 杜 陵 印 刷